

弁証法論理哲学について

On a Dialectic Logic Philosophy

高原 利生

TAKAHARA Toshio takahara-t@m.icice.org

1. はじめに

A 哲学を論理学と世界観とする。弁証法論理哲学は、哲学の一種で、弁証法的論理による歴史・論理哲学である。単純に、ゼロから、歴史的発展の経緯的規則性を持ち、B 生き方、世界の変更との連続性がある論理哲学を作る。

2. 論理学の要件と、そのための態度、基本概念 A

2.1 要件 [Taka-70]

1 論理に、認識と変更の2つの分野がある。変更は、認識、分かることが前提である。まず「何か」を「認識できる=分かる」ことがどういふことが分かなければならない。

「何か」は扱える可能性のある全てでなければならぬ。「何か」を、ものと脳の中の観念の二つ、及び存在と過程(運動)の二つからなる「あるもの」とした。「ある」「ない」「ある」である。この「何か」を**事実**ということにした。ある仮説を立て何かと何かの関係が分かると、何かが「分かる」ことが進む気がする。究極的にはこれにより、何かの構造(全ての要素とその間の関係)が分かり、構造、構造の属性(→機能の本質)つまり**本質と構造**が分かる。

2 正しい思考方法と正しい議論が必要である。また、現実には、全ての人のその時の潜在意識[ES]、感情、感性が、今の行動を決めている。潜在意識も感情的感性的判断も正しくなければならぬ。身に着いた論理がこれらのため必要である。

2.2 基本態度と最少の基本概念 [Taka-70]

本質と構造の把握のため、近似による単純化、仮説を作る態度と、事実把握のための最少の基本概念を準備しておく。

1 事実を、必要最小限モデル近似として、客観的事実、知覚した一次的情報、それを対象化した二次的情報の三つからなるとする。知覚した事実を対象化した二次的情報で述べる言説は仮説である。その正しさは客観的事実、一次的情報により検証される。この仮説設定は永続する過程で、今より良い仮説、他により良い仮説は必ずある。

弁証法論理学は、関係(を表す)命題(「オブジェクト1-関係-オブジェクト2」で表現される矛盾モデルに等しい)を扱う。

2 事実を、ある**粒度**(抽象化具体化の程度) [FIT2005/2] で切り取り、思考によって扱う情報を**オブジェクト**とする。オブジェクトは必ず観念、情報である。粒度の本質はオブジェクトの抽象化具体化の程度決定、要素はオブジェクトの空間的、時間的範囲、無数の属性からの特定の三つである。

適正な粒度は、網羅された中から選ばれ、同時に網羅はある粒度で行われる。論理的網羅 [Taka-70] が重要である。

3. 論理学と世界観、歴史性と論理性、A と B

弁証法的論理は、形式論理と異なり、**事実**の要素の変化性、**歴史性**と、事実の要素間の**関係性**がある世界を扱う。この文は弁証法論理の説明文であるが、事実把握は世界観を作り、関係は論理に等しく論理の全体が論理学なので、事実、世界観の中の歴史(学)と論理(学)の関係を表す文でもある。

哲学(論理学と世界観)は、文化・文明誕生後は、次のような歴史的意識的サイクルが続く。

1 対象として世界観を含む弁証法論理(論理学と世界観)は、事実を変え、世界観が変わっていく(論理学→世界観)。

2 変わった世界観が新しい価値観を作る[Taka-70]。新しい事実と新しい価値観の間に差が生じ問題が生まれ、新しい論理が必要になり、論理を進展させていく(論理学←世界観)。

3 1に戻る。

これは**事実の歴史性の一般的表現**を示す。文化・文明成立後の歴史と論理の一致の表現でもある。論理学と世界観が双方向入れ子の二項になっている構造も、論理が主導する哲学であるから**論理哲学**という名前にした理由も示している。

事実に対するこれらの表現の差は、とらえる粒度、論理的網羅の差による。どれが良いかの基準は、関連する粒度が同じに揃っていること、網羅の論理性、有用性による。

B 哲学、常識、潜在意識、態度、感情、生き方、世界変更は、人の中の時間経過に応じた同じものの異なった現れである。それを可能にする哲学が論理哲学である。

4. 弁証法論理哲学の改良 [FIT2021の改善] A

論理学は1 扱うオブジェクト、2 そのオブジェクトの認識と変更の方法の全体である。

思考は、関係命題により問題を定式化する抽象化、**推論**、具体化で構成される[Naka-2005の解釈]。具体化は、状況に応じて変わるので、その方法は扱わない。矛盾モデル(関係命題)への定式化と推論が弁証法論理である。

4.1 推論の形式の改良

1) 今の推論の欠点 [FIT2021]

形式論理上の演繹(一般の特殊化 [石本新 ニッポニカ])は情報が増えない。それ以外の演繹の正しさは、条件や、原因-結果の粒度に依存している。従来の帰納(特殊の一般化 [石本新 ニッポニカ])は推論であり厳密でない。

2) 推論の改良 [FIT2014,15] [FIT2021] [IPSJ2021]

推論の連鎖による演繹は、論理的網羅による仮説設定を行うことでより正確になる。従来の帰納の無条件の一般化を、論理的網羅の結果によって選んだ条件での一般化に代えることでより正確になる。また、一般、特殊の区別は相対的なので、特殊を極限まで拡大し、仮説設定という特殊化の別の特殊化に、演繹(一般の特殊化)、帰納(特殊の一般化)を含ませる。こうして形式論理上の演繹以外も仮説設定に統一する。これが**論理性の統一表現**である。

論理的網羅が形式的網羅である場合が形式論理である。論理的網羅と一般と特殊の相対性の二つに依存している推論なので完全ではないが、より善い推論が得られる。

命題の検証が必要である。本稿の案は、1 次的事実についての仮説で、かつある条件がある場合は、検証を兼ね得る。**推論の方法は、基本態度、基本概念から得られた。**

4.2 歴史の経験法則と矛盾モデルの進化[FIT2021 の改善]

1) 矛盾は、客観領域では、オブジェクト1,2の二項が作る運動、人の領域では、あるべき価値と現実の差である問題とその解決の運動である。

矛盾は、次の三種に分かれる。

・1 変化変更矛盾 (通常の変化・変更) (これを含むことが矛盾モデルを使う利点)

・2 (一時的)両立矛盾 (弁証法の普通の意味の矛盾、オブジェクト1,2が両立している、又は両立を目指す運動)

人の領域の場合、1 ランダムに見える事象の中から価値実現のため変えたい事実、問題が起こる。2 問題の中から、お互いの条件として作用し合う2項が出てくる[DI]。3 問題解決のために定式化した両立矛盾を解消し解を作る。

・3 一体型矛盾 (永続する両立矛盾) [TS2011]

一体型矛盾の歴史は古く、生命と人類の長い歴史の中で、もともと一つだったものが、二つのオブジェクトに、二つの思考に、または二つの態度に分かれていく。そして、分かれたそれぞれは独自の発展を始める。ある時から、その二つは再統合の運動を始め、**双方向の入れ子構造**ができることがある。複数項がお互いに一体、全体の要素としてとして発展し続けることができるようになり一体型矛盾ができる。[TS2011]

例：雌雄のように、もともとの単性生殖が分かれて発展し、両性生殖ができる進化。認識と行動。感情と論理。

2) 論理の歴史的結果が矛盾に固定化されて行き、以下の順に、**後の高度な矛盾が、前のより基本的矛盾に積み重なりながら同時並行的に発展する時間構造**ができる。

(宇宙創成後) 変化・変更

→ (生命誕生後) (擬人的な)機能と構造の矛盾。例：自律運動をする生命。無意識の一体型矛盾。例：進化

→ (知的生命誕生後：人に生物的な個の多様性の無限の可能性が生まれた後) 意図的な変化・変更。

→ (技術開発後) 意図的な可能性と現実性の矛盾 (機能の可能性が現実になり得る客観的事実を意識する運動)、意図的な機能と構造の矛盾 (機能を実現する構造を意識的に作る運動)。

→ (農業革命、6千年前の物々交換、4千年前の制度・技術の文化・文明開発後) 矛盾の二項の向上をもたらし続ける一体型矛盾として、意図的な対象化と(間違った所有と帰属の)一方向一体化の一体型矛盾。

→ (意図的な機能と構造の矛盾が蓄積され複雑さが増した結果) 複数の事象変化の歴史傾向と複数の仮説の矛盾。

機能と構造の矛盾、事象と仮説の矛盾の両立が2項の場合でなく複数項の場合が多くなる。

→ (今後) 意図的な対象化と双方向一体化の一体型矛盾。

3) 歴史が進むにつれ、論理学の対象が増え続け、方法、論理は高度になり続ける。この矛盾の内容の歴史把握は、時代に合った論理学を可能にする。

弁証法論理の要素である矛盾モデルに、事実と価値の発展の歴史が埋め込まれている。**歴史性のやや具体的な表現**になっている。

歴史性の具体的な表現は、基本態度、基本概念に加え、推論の方法から得られた。

5. 結論 AとB

A ヴィトゲンシュタイン「論理哲学論考」と異なる論理哲学の要件、生成構造、概略が明らかになった。

事実、歴史(学)、論理(学)は、同じものを違う粒度で観たものということもでき、三つのそれぞれが他の二つと双方向一体化の要素であると観ることもできる。いずれも論理が主導して運動を続けていく。

弁証法歴史・論理哲学である論理哲学は、論理的網羅、全体を求める態度によって新しい事実、価値と生き方を作る。

はじめに言うておくべきだったが、それぞれの概念には理想と個人ごとの実際があり、どちらも変え続ける必要がある。プラグマテックに有用なようにするのが良い。

B 更に、**哲学、常識、潜在意識、態度、感情、生き方、世界変更**も、同様に、関連し全体を構成し一体型矛盾の要素であり同時に作り実行し続けるしかない [Taka-70]。論理哲学、生き方、世界は、常に未完成である。[EPM]

詳細な定式化、コンピューター上の実現も課題である。

謝辞

本稿は、大阪学院大学名誉教授中川徹博士の長年に亘るご理解とご支援の賜物である。厚く御礼申し上げます。

参考文献

[EPM] K. マルクス, 「経済学・哲学手稿」藤澤晋訳, 国民文庫, p.153, 1963, 原出版 1933, 手稿 1844.

[DI] K. マルクス, F. エンゲルス「ドイツイデオロギー」古在訳, 岩波文庫, 1956, 原著 1845-46.

[FIT2005/2] 高原利生, “オブジェクト再考3 –視点と粒度–”, FIT2005, K-085, FIT2005. 2005.

[ES] Ed Sickafus, “Subconscious Problem Solving Using Hazy Heuristics”, International Journal of Systematic Innovation, Vol. 3. ICSI2014

高原、古謝、中川共訳, 2015.07. <http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2015Papers/Sickafus-ICSI2014/Sickafus-ICSI2014-Subconscious-150721.html>

[Naka-2005] 中川徹, “創造的問題解決の新しいパラダイム –類比思考に頼らないUSITの6箱方式–” 日本創造学会第27回研究大会 2005.

[Taka-70] 高原利生, “論理的網羅：永久に未完成の哲学ノート 第一部第二部の今” <http://www.ogjc.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2019Papers/Takahara-Papers2019/Taka-54-RET-Memo-200106.html>

[FIT2020] 高原利生, “事実から作る 価値, 真実, シンプルな論理の骨子”, FIT2020, O-012, 2020.

[IPSJ2021] 高原, “通常の推論を仮説設定に統一する条件”, 情報処理学会 83 全大, 2F-05, 2021.

[FIT2021] 高原, “弁証法論理が作る哲学、その歴史的論理構造”, FIT2021, O-026, 2021.

[Taka-70] 高原利生, 「未完成の哲学ノート」18 版, 2021.03. 制作 MyISBN 発行所 デザインエッグ (株)

[Taka-76] 高原利生, 「論理哲学ノート」2022 年発売予定, 制作 MyISBN 発行所 デザインエッグ (株)